

佳作

大切なつながり

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校三年 石井 かんの

わたしと弟は毎日のようにけんかをする。ある日、いつも通りけんかをしていた。するとお母さんが近づいて来た。いつも通りお母さんがおこり出したと思っ
て少しにげた。するとお母さんは弱よわしい声で、

「いつもごめんね。お母さんね、ひいおじいちゃんとおひいおばあちゃんの家
に毎日行くことになって、おこるひまもないんだ。だから二人はなかよくして。」

と言った。お母さんは泣いていた。お母さんが泣くところをはじめて見た。たしかにわたし
が学校や習い事から帰って来たとき、お母さんがいないことが多くな
った。朝おきたらもういないときもある。おしゃれもなくな
った。でもわたしは、お母さんが人から言われてではなく、自
分からすすんで家に行

っているということを知っている。なぜなら、
「お母さんはね、自分のおじいちゃんとおばあちゃん
とすんでいたことがあって、お母さんのおむつ
をかえてもらっていたはずだから、今度はお母さん
がおじいちゃんとおばあちゃんのおむつをかえ
たいんだ。」

といつか教えてくれたことがあったからだ。その時
わたしは、「お母さんはすごい」と思ったのをおぼ
えている。そのことを今、実行していたんだと気が
ついた。そして、弟とけんかをしてたことをわす
れていた。

「わたしに何か手伝えることはない。」

と言ったら、お母さんは、

「えー、うれしい。二人は自分のことを一生けん命
やってくれればいいよ。それだけでも十分手伝っ
てくれることになるよ。」

と言ってくれた。そして、お母さんは「かいご」に
ついて教えてくれた。

わたしは、やさしいお母さんが大すきだ。みんな
からたよられるようなお母さんに生まれて来てよか
ったと思う。わたしも大人になったら、自分のこと
ばかりではなく、人のことも一つ一つ考えて、いつ

もえ顔でいるお母さんのようになりたい。そして、おじいちゃんとおばあちゃんとしよにすみたい。家ぞくみんながしあわせになってほしいから、なるべくけんかはしないようにするよ。